

福岡市

有田古代遺跡発掘調査概報

中葉



福岡市教育委員会

1967

# 発刊のことば



このたび、有田近跡の緊急調査を認および県の補助を受けて、九州大学文学部考古学研究室、有田土地区画整理組合および土地所有者の方々など各方面の指導と協力を得て実施しましたところ、予想以上の成果をあげることができました。

このことは、ひとえに関係者各位の文化財に対する深い御理解と御協力によるものと思います。

この調査結果によって、われわれの祖先の生活様式をしのび、郷土愛の精神をかん養するとともに学校教育ならびに社会教育の分野において大いに活用していただきたいと思います。

なお、本件の企画にあたり、調査および原稿の執筆を担当された九州大学文学部考古学研究室ならびに航空写真を提供くださった朝日新聞社をはじめ、福岡県教育委員会、関係者各位の御協力に対して深甚の感謝とお礼を申し上げます。

昭和42年3月20日

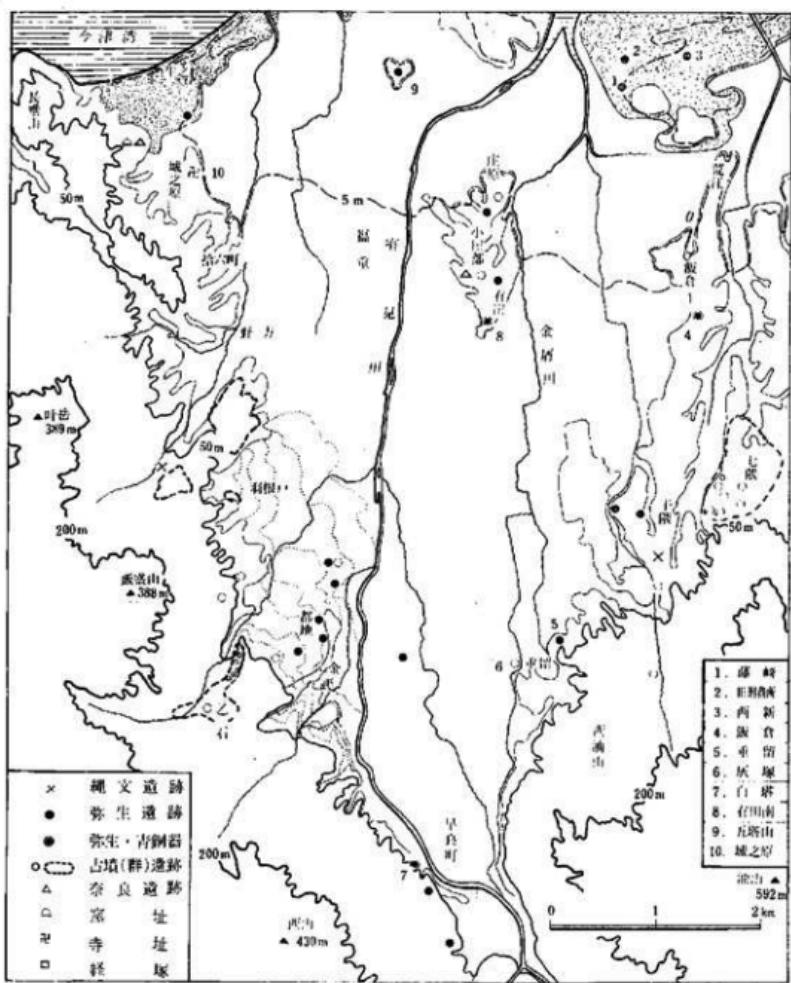
福岡市教育委員会

教育長 東 正之

## 目 次

I	早良平野の歴史地理的環境	1
II	調査の概況	3
III	遺跡各説	4
1.	29街区V字状溝（弥生時代）	4
2.	堅穴住居址（古墳時代）	6
a.	25街区堅穴住居址 b. 27街区1号堅穴住居址 c. 27街区2号堅穴住居址	
3.	13街区堅穴（奈良時代）	17
4.	31街区貯蔵穴及び溝	19
IV	むすび	19

# I 早良平野の歴史地理的環境 (第1図、第2図)



第1図 早良平野の地形と遺跡

福岡市の西南にあたる早良平野は現在その大半が福岡市に編入されているが、古く律令時代には肥伊・能解・額田・早良・平群・田部の六郷を合せて早良郡を構成していた。この地域は東西南の三方を背振山塊に源を発する油山、西山、叶山にかこまれ、北は博多湾に面して東西に狭く南北に長い平野をつくり、中央を貫流する室見川とその支流は地形に従って博多湾に集められる。平野の耕地開発



裝飾付壺及び器台  
(羽根戸出土)

もこれらの水系に負うて早くから条里制が施行され、今日海拔5mあたりまでその遺跡がたどられる。山塊の東は往時大宰府庁のあった筑紫郡につづき、西は糸島郡、南は佐賀県神崎郡に通ずる地理的位置を占めているので、古来通廊的性格を負わされ、古代駅制の整備によって二線の官道があった。一つは石瀬駅（福岡市三宅）から屋形原、七隈を経て早良平野に入り、額田駅（野方）を通って今宿、周船寺を経て比善駅（糸島郡前原町）に至り今の筑肥線沿いに唐津へ通する北道。もう一つは糸島郡井原から早良町飯塚、曲瀬を経て隈崎駅（早良町熊崎）を通り、小笠木を経て筑紫郡別所に通する南道である。このほか糸島郡への捷路として乙石から日向鉢をこえて網にぬけるコースもある。これらの交通路はおそらく大化以前の流通をもひき継いでいるであろうが、特に北路は古代の幹線であり、野方の北には早良郡内唯一の城ノ原廢寺が奈良時代に造営され、さかのばって3世紀の「難志」倭人伝にみえる末底國（唐津市鏡地区）—伊都国（糸島郡前原町）—奴國（筑紫郡春日町須玖）のルートもほぼこれにあたると考えられ、有田遺跡もこの沿線に位置している。

**有田遺跡**は早良平野のほぼ中央、室見川と金屑川にはさまれた洪積層からなる低位丘陵上にある。海拔5mの等高線は庄原、小田部、有田の部落があるこの丘陵の縁辺をめぐり、東は西油山の麓から干隈、飯倉、荒江を含んで北にのびる洪積層丘陵につらなり、西は福重、拾六町、城ノ原を経て長垂山麓へとつなづく。この等高線以南の平野部は三方を囲む花崗岩から成る山塊に源を発する室見川とその支流によって解析流出した砂質土壤が徐々に北側に低く扇状堆積した冲積平野を形成している。

また金武、都地、羽根戸の西側山麓に広がる扇状台地、有田附近と千隈から飯倉に至る低位丘陵附近では洪積層土壤の影響をうけて粘性を帯びた埴壤土となって畠作に適している。一方、嵐津崎、妙見崎のような突出した岬の存在がこの地方特有の北西風をうけて博多湾に左転迴流を生じ、岬の間をつなぐように弓状砂洲を形成した。西新町、生の松原がこのようにして出現し、海拔5mをこえるような砂丘堤防に生長してその内側にラグーンがみられるような景観をつくり出す。おそらく早良平野に原始水稻栽培の技術がもたらされた弥生時代初頭にあっては、有田遺跡の周辺に展開するこのような景観と土性をもったところが、自然的条件に強く依存する初期稻作文化を定着させるに適していたであろう。従って砂洲や洪積層低位丘陵の縁辺に弥生時代の住居や墳墓が営まれるようになったのもうなずかれる。

早良平野の気候は一般に山陰型に属し、年間平均降雨量1500ミリをかぞえ、稲作には支障ないが平野の南奥にあたる山麓附近では冬期に1m以上の積雪をみるとがあり、早稲に適しているが中・晚稻は熱に適していない。

弥生前期末頃から羽根戸、都地、金武方面の扇状台地にも生活の舞台が拡大され、中～後期には技術的な進歩の上に畑作農耕が飛躍的に展開した。この地域の墓制には飯倉、有田の豪棺や五塔山（五島山）の石棺のように青銅利器を副葬するものもあるが、伊都國や奴國の地域にみるように大群集をなし、また特定の被葬者が大量の副葬品を所持するような現象は指摘できない。乃ち政治的な核となりうるような方向に発展しなかった。このような現象は、伊都と奴の中間に介在する地理的位置にも大きな関係がありそうである。このことは古墳時代



第2図 早良地方の地質図  
(浦田英夫「福岡市附近の平坦面の地歴的研究」、九大教養部地学研究報告第8号 1962年)

前期になると明瞭にあらわれてくる。すなわち、巨大な前期古墳及びこれに続く前方後円墳の群落をわれわれはこの平野のどこにも見出しが出来ないのであり、わずかに重留の灰塚が近年まで前期古墳の面影を止めていたが、いまその形を畦畔に止めている。群衆古墳激盛期の古墳時代後期に入ると、この地域の山麓地帯にも、羽根戸・金武・七隈などに横穴式石室が多数営まれるようになる。現在伊勢神宮御古館に蔵する羽根戸古墳出土の壮麗な子持須恵器の如き、わずかによき日の栄光を今日に伝えるものである。

有田古代集落遺跡は、弥生中期・終末期のもの的存在も知られており、平安時代の青磁片も採集されているという。和名抄にいう田部郷こそは、広い冲積平野の中に千年の間生き続けてきた土着の人々の集落の後身であり、ただ今われわれの仕事に協力をおしまれなかった有田部落の人々の宅地造成の事業もまた、この田部の地に生き抜いてきた人々の、時代の流れと共に新らしく営なまれるたくましい村造りの一コまであるというべきであろう。

## II 調査の概況（第7図、第26図）

昭和40年の秋に福岡市大字有田部落の土地区画整理組合による宅地造成工事が施行され多量の遺跡や遺物が発見された。その後本遺跡の発掘調査の計画が市当局及び福岡県教育委員会の渡辺正氣・松岡史氏らを中心に具体化し、われわれははからずもその実施の仕事を委託されたので昭和41年1月20日に予備調査を行った。

現地は南北1km、幅0.7kmの細長い洪積層台地の中央部南よりの最高所で、海拔15m、水田よりの比高8mを示している。新街区の道路開設当時関係者によって記録された畠地崖面に露出した包含層の分布を手がかりに一般調査を試みた。

遺跡推定範囲は東西600m、南北360mの20ヘクタール強に及ぶ広さであり、遺跡は古墳時代前期を中心に、上限は弥生前期にさかのぼり、下限は奈良時代に及ぶ1,000年以上にわたる長期間の古代集落遺跡であることが明らかになった。畠地である現地表は約50cm削平されたものであり、また発掘可能な處が種々の事情で小地域に限定されることが知られた。本調査開始にあたって、われわれは

①弥生前期初頭の遺構、特に未だ解明されていない家屋の構造及び集落の構造の究明 ②古墳時代の住居址の構造・形態の変遷と土器の編年等の二点を調査研究の重要な課題としてえらんだ。

発掘調査は2月20日から3月11日までの20日間に亘ったが、8ヶ所延500m<sup>2</sup>の試掘溝を中心に行ない、弥生前期のV字状溝一本、古墳時代前期の竪穴家屋二棟、古墳時代後期の竪穴家屋一棟、奈良時代の竪穴家屋一棟などを発見調査して、所期の成果をあげることができた。8ヶ所の発掘地域は13、

18、24、25、27、29、31街区と公園予定地（第7図、第26図）

8・7・2・3・4・6・1・9

であるが、このうち遺構が発見されたのは13・18・25・27・29・31街区である。公園予定地と24街区は既に削平されて遺跡は消滅していた。18街区に不規則な形状に広がる遺構プランを検出したが竪穴住居址が幾重にも重複したとみられる。時間的余裕がなく、未掘に終った。

本回の調査発掘は調査面積500m<sup>2</sup>に及んだが、しかしながら



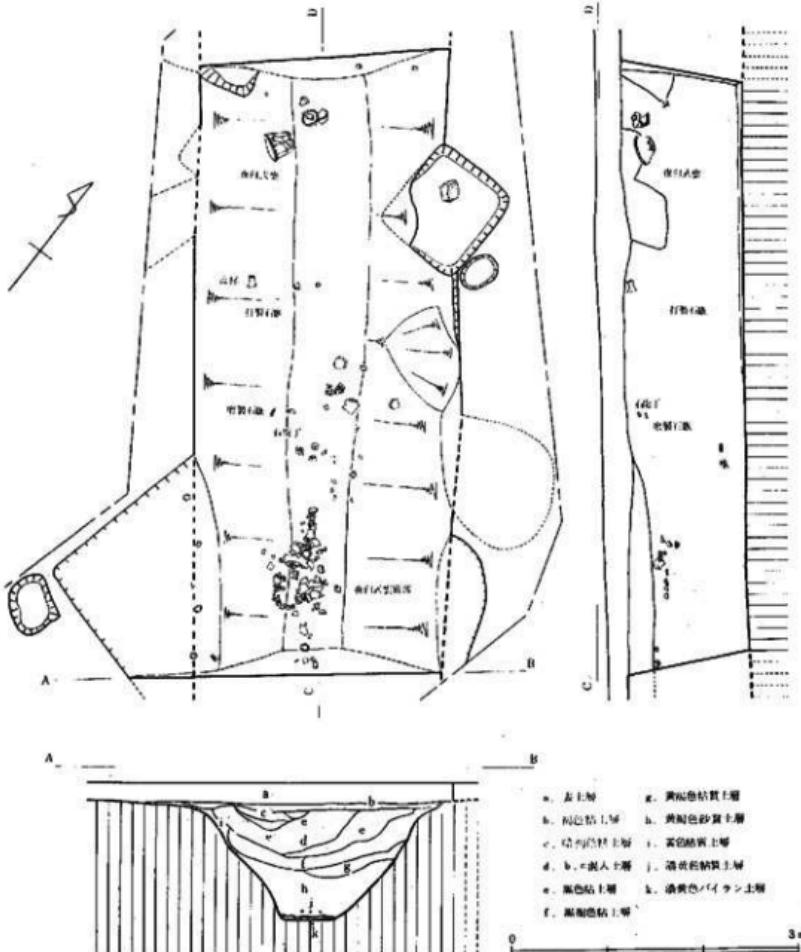
第3図 市教育委員及び社会教育委員の見学風景

全城の四百分の一にすぎない。宅地造成のための削平・埋立てあるいは耕地の天端等で遺跡が既に失われている面積も相当あるが、なお相当の遺跡が残存するとみられる。なお弥生時代終末期から古墳時代初頭とみられる包含層の露出も検出しており、なお今後の調査に期待するところが大きい。

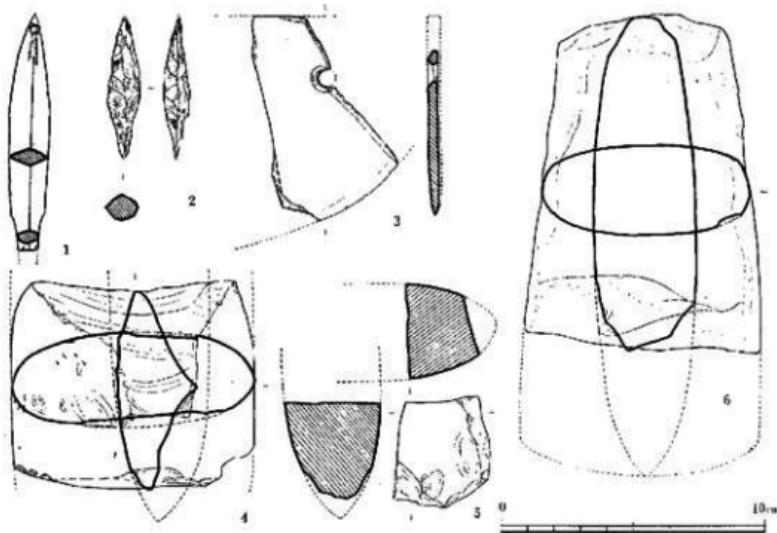
### III 遺跡各説

#### 1. 29街区V字状溝（弥生時代）（第4図）

この追構は福岡市板付遺跡にみられるような夜臼式土器と板付工式土器を共伴する弥生文化切頭の溝である。現在確認できる溝の長さは約60mで、29街区より27街区の東端にむけて東南→西北の方向に



第4図 29街区V字状溝実測図



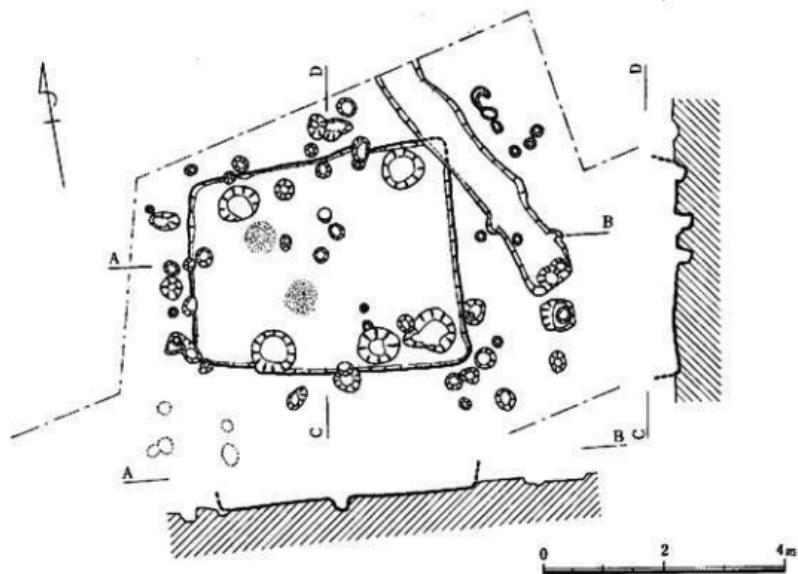
第5図 29街区V字状溝出土石器実測図

のびている。このたび発掘したのはその東南端の29街区に属する非常にわずかな部分で、6m余にすぎない。したがって同時代の住居址、貯蔵穴、墳墓等はいまだまったく確認できていないが、遺構および遺物については板付遺跡その他の遺跡で得られたと同様な成果を得ることができた。

まず29街区の東側と北側に露出していた溝の状態をみるために、北の道路沿いに東西に幅2m、長さ10mのトレチとそれの東端より南にむけて幅2m、長さ20mのトレチをL字状に設定したが、溝の状態がつかめなかったので、北と東に露出している溝の断面を結んで表上を除去したところ、溝の表面が露出したので長さ6.5mの発掘区塀を設けて、20cmずつ掘りさげていった。溝の形状は、上部が後世の遺構で切られているが、板付遺跡でみられたと同様な巨大なV字状の溝であって、幅約2.7m、深さ約1.3mでV字状断面はシンメトリーである。底部はわずかに現地形にそって東南の方向に傾斜している(第4図)。

遺物の出土状態はまず地表下30~40cmの溝の中の包含層の上部にはじまり、夜臼式土器、板付I式土器を主とし、板付II式、弥生中・後期の土器、土偶像、須恵器、瓦器、骨磁等も混じている。地表下40~80cmのところになると夜臼式土器、板付I式土器だけとなり、量的にも多く、石器もこの層が多い。地表下80cm以下より溝の底部にかけてはこれまでと同様の土器の片が散在する程度である。遺物は傾斜に沿って低い方に多く分布している。

(遺物)(第5図、第21図) 石器(第5図)には鉢2、石斧1、石矛3がある。石鉢は頁岩の柳葉形有柄式磨製石鉢(1)、サスカイト製の打製石鉢(2)がある。前者は先端と矛の根を少し欠いているが、ほぼ完形で現存長8.6cmである。類例に福岡県糸島郡志摩の支石墓、筑紫郡春日町伯玄社、中間市田生などがあり、朝鮮半島で有柄式磨製石劍とともに発見されているものと同型である。後者は新あるいは先の後継をもつものとも考えられる。石斧1は頁岩質砂岩で板付遺跡出土のものと類似する。石矛は頁岩(4)、玄武岩(5)、頁岩質砂岩(6)のものがある。(5)は溝の東南の上部を切って營なされた住居址と思われる遺構の床面に接して出土しており他の出土遺物からみて(第21図の9)これは中期に下



第6図 25街区堅穴住居址実測図

るものと思われる。(4)、(6)は夜臼・板付期のものとしてさしつかえない。

土器(第21図)は(1)～(6)、(8)、(12)、(13)、(14)、(15)、(16)、(17)、(18)が夜臼式土器あるいはその系統の土器であり、(7)、(9)、(11)、(16)、(19)、(21)、(22)、(23)、(24)が板付I式土器で、(5)は板付II式の高杯の脚である。(9)は懸垂のための紐通しの孔の下部に凸帯がつけられており、この上部が煮沸のためのものだったことを示している。これは弥生中～後期に下るものと思われる。(13)は夜臼式甌の完形品であるが、底部は本体より5m近くもなれたところから出土した。これは大きな刻目凸帯を口縁部にもち、たてあるいはななめの条痕を残し、底はやや上げ底で円錐はりつけの特徴をもっている。これらは夜臼式土器の特徴であるが器底のカーブは板付I式(速賀川式)の甌に近似している。(14)は甌で少し上げ底の円錐はりつけの特徴を有している。これは底部に火熱にあった痕跡をのこしている。(15)、(24)は板付I式の大瓶甌で、(16)は舟塗りである。出土した土器片は約100片であり、器形のわかるものは少ないが、甌は夜臼式土器が多く、甌は板付I式土器が多い。

## 2. 堅穴住居址（古墳時代）

### a. 25街区堅穴住居址（第6図、第8図）

幅2m、長さ30mの東西トレンチの西側寄りに幅2m、長さ42mの南北トレンチを十字形に設定した。この東西トレンチの東端近くに堅穴住居址の一部が露出したので、 $10 \times 4$ mの拡張区を北方に設定した。堅穴住居址は長辺4.5m、西短辺3m、東短辺3.75mのやや合形に近い方形のプランを示す。壁は53°の傾斜をもち、床面までの深さは10cmであるが、浅いところでは僅かに3cmしかなく、すでに上面がカットされている。甌址と考えられる焼上は二ヶ所検出され、一つは北西隅から1.45mの所に直径60cmの大きさで、他は、南壁から1.3m北方に同直径の大きさで位置する。いずれも中央

第7図 空からみた有田遺跡





第8图 25街区竖穴住居址俯视



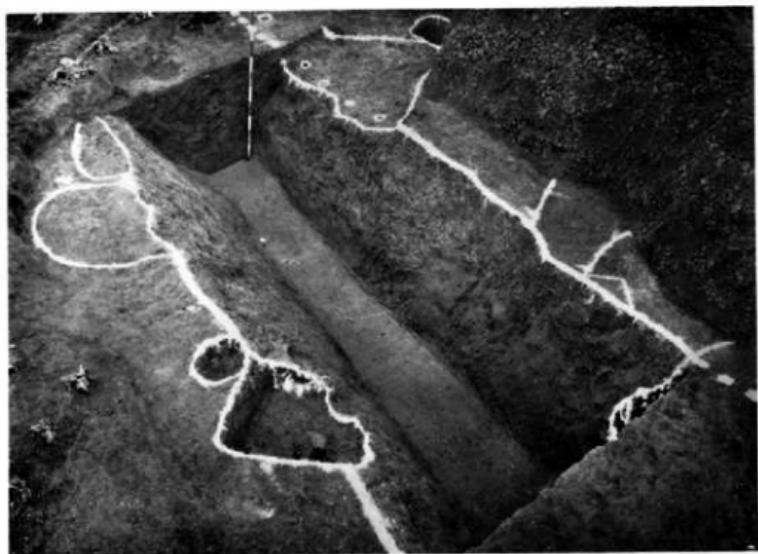
第9图 13街区竖穴出土状态



第 10 図 27 街区 2 号 墓穴住居址出土状態



第 11 図 27 街区 1 号 墓穴住居址出土状態



第12図 29街区V字状溝出土状態



第13図 29街区V字状溝土器出土状態

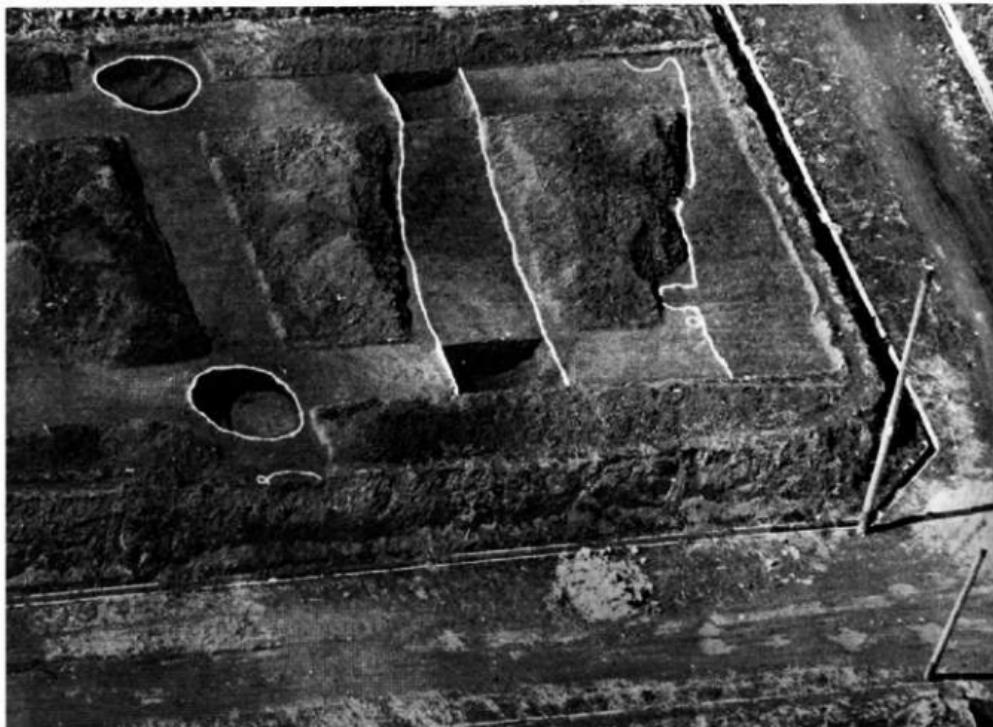


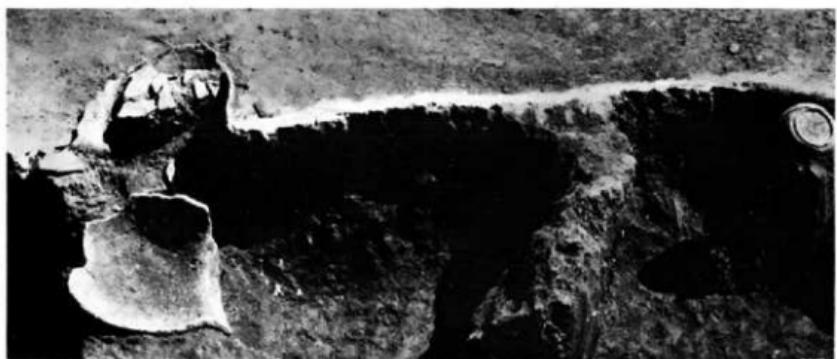


上・第14図 V字状溝磨製石器、石窓丁出土状態

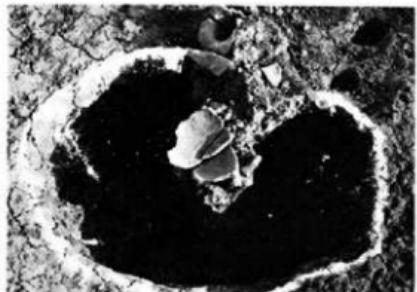
左・第15図 V字状溝内臼式甕出土状態

第16図 31街区 袋状貯藏穴及び溝脩観





第17圖 13街区堅穴 土師器（左）、須恵器（右）出土狀態



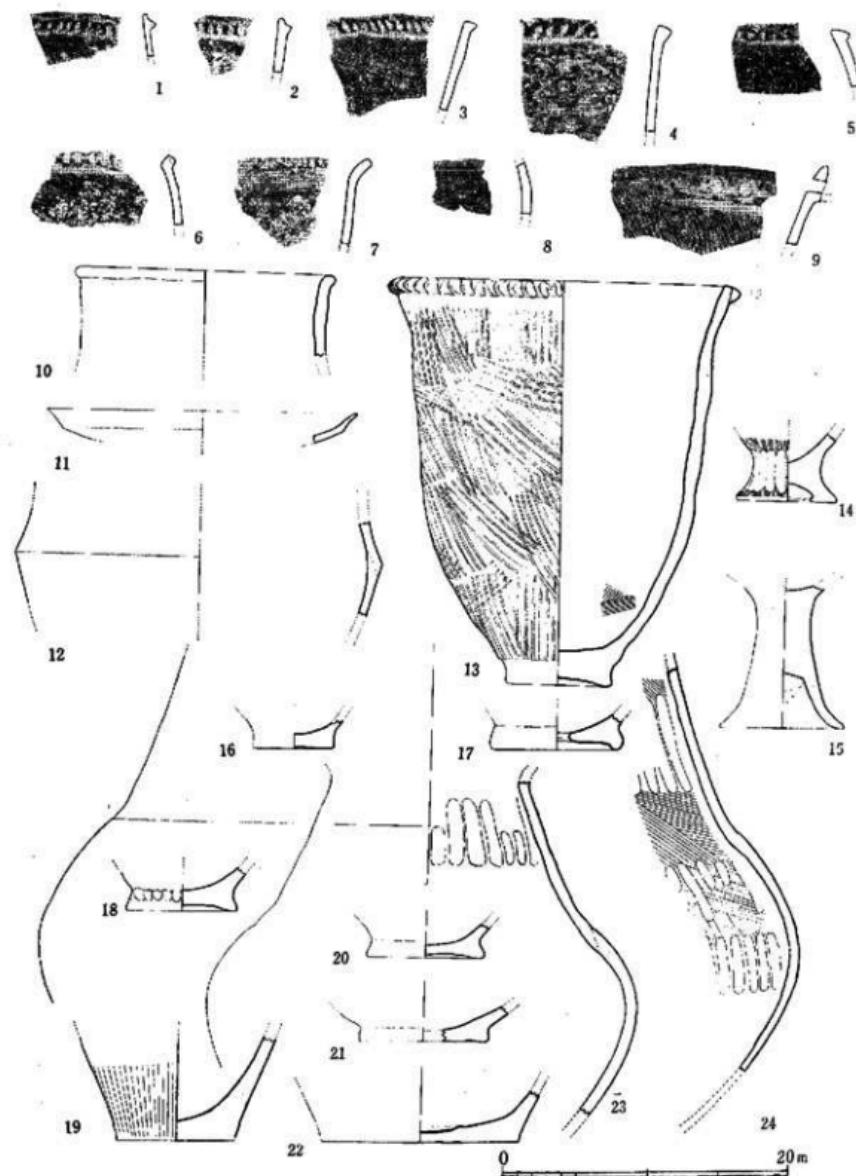
第18圖 25街区堅穴住居址土師器出土狀態



第19圖 25街区堅穴住居址石器出土狀態



第20圖 25街区堅穴住居址土師器出土狀態



第 21 図 29 街区 V 字状溝出土上土器折影及び実測図

よりやや堅寄りであることが注目される。

発掘した柱穴は大小合わせて55にも及ぶが、すべての柱穴がこの堅穴住居址に伴ったとは到底考えられない。重なり合った柱穴も幾つか有るので、実際にこの堅穴住居址に伴った柱穴は限定される。これら柱穴の中で、堅穴住居址内の四隅の四個と、南北沿いの二個は他の柱穴より口径が比較的大きく60~70 cmを示し、中でも四隅の四個はこの堅穴住居址の毛柱を形成する四柱穴と考えられ、平面が矩形に近い事からも、寄棟造の家屋が想定される。他の1個は深さが床面から52 cmと特に深く、中から小形丸底壺が出上しており、貯蔵穴とも考えられる。

この堅穴住居址の東北隅をわずかにカットして幅70~80 cm、現存深10 cmの溝が北西、東南に走るが、堅穴東北隅より3 m南で終結する。上部は削平されている。時期を決定するに足る資料は何も出土しなかった。

(堅穴住居址出土遺物) (第25図1・2・3・4)図に掲載したものは全て床面より出土したもので高杯の杯部(1)、筒脚部(2)、小型丸底壺(4)、壺形土器(5)等がある。筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡出土の上脚器と同時期に比定でき、4世紀後半のものと推定され今後も発掘された四つの堅穴住居址の中で最も古い時期に比定することができる。他に砥石が1個出土している。これは現地で盗難にあった。

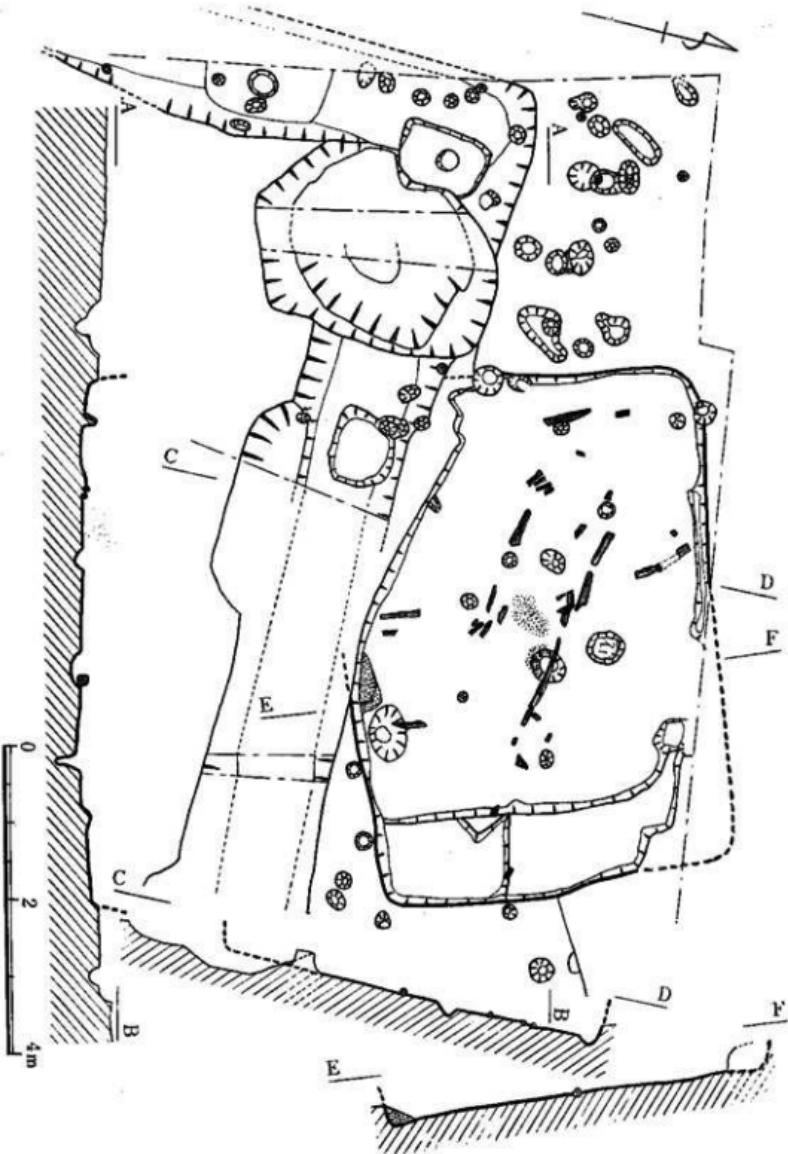
### b. 27街区1号堅穴住居址 (第11図、第22図)

耕作時にかなりの遺物の出土をみたと伝える。幅2 m、長さ30mの南北トレンチと、これに十字形に幅2 m、長さ20mの東西トレンチを設定した。その後十字形の交点から東北方を東西、南北トレンチに平行に延びし拡張区Cとした。木堅穴はこの拡張区より検出されたものであるが、既に北辺の大部と東辺の一帯が土地区画整理のための道路によって切断され、南辺の西半分と西辺の南半分は後世の溝によって東南、北西に切断されている。堅穴住居址は推定復元によれば長辺6.75m、短辺3.75 mの長方形プランを示し、床面は平らである。壁体の現存高は20~25 cmで地主の話によると、後世上部は削平されたと考えられる。壁は60°の傾斜を持つ。北辺の壁沿いに幅10 cm、深さ10 cm程の側溝が走っているが、北辺の一部で終わっている。27街区2号堅穴住居址にも同様の溝がみられる。福岡市弥永原の弥生後期堅穴住居址では北辺と西辺と東辺の一部に沿って堅穴住居址内に側溝が走っていた。東辺沿いに幅1 mのベッド状の造構が設けられているが北方では西に向かってカーブし、南方では一段低くなっている。このベッド状造構の上質は赤山と黒色土が混じ合ったもので、当初から掘り残されたものではなく、堅穴住居址完成後に附設されたものである。坪は堅穴住居址のほぼ中央にあるが、火熱のために赤変して焼きしまった粘土塊が堅穴住居址南辺のほぼ中央に認められた。ほかにガスのすぐ北側に浅く掘られた穴の中に径25×35 cmの工作台かとみられる砂岩の扁平な自然石が掘り出されている。柱穴は堅穴住居址内外合わせて38個にも及び、しかも大小様々でこの堅穴住居址の上部構造を推定出来る配置をこの中から適確に擇び出すことは困難である。

この家屋は火災に会ったらしく、炭化材が多量に残存しており、しかも床面は焼けて固く焼きしめられている。この炭化材は一つは東南隅と西北隅を結ぶ対角線上に残っており他の大部分は各辺に対してほぼ直角に倒れたように残っている。はすかに倒れている炭化材は曲がりくねった自然木で、断面円形をなし、直径7 cm程のものである。他の炭化材の直径も6~7 cmのものが多く、中には3~4 cmのものもある。建築様式は切妻形の家屋が想定される。

この堅穴住居址の南方に三つの性質の異なる造構が重なり合っている。出土遺物が少ないが31街区のものと同型式の大きな円形の袋状貯藏穴が一番古い時期のもので直径3 m、深さ1.6 mで断面U字形をなす。この袋状貯藏穴が埋まつたのち溝が掘られている。この溝は狭い所で幅1.6 m、広い所で幅2 mで、広がりながら西に向かう南北トレンチの西端で南方には直角にカーブする。断面逆梯形で深さは40~50 cmである。出土遺物に石繩・高台附着の塊等があり、平安末期頃のものと推定される。この溝を掘り削って粘土で方形に固め、掘立柱の柱穴を作っている造構が最も新らしい時期は

第22圖 27番区1号竖穴住居址実測図



わからない。

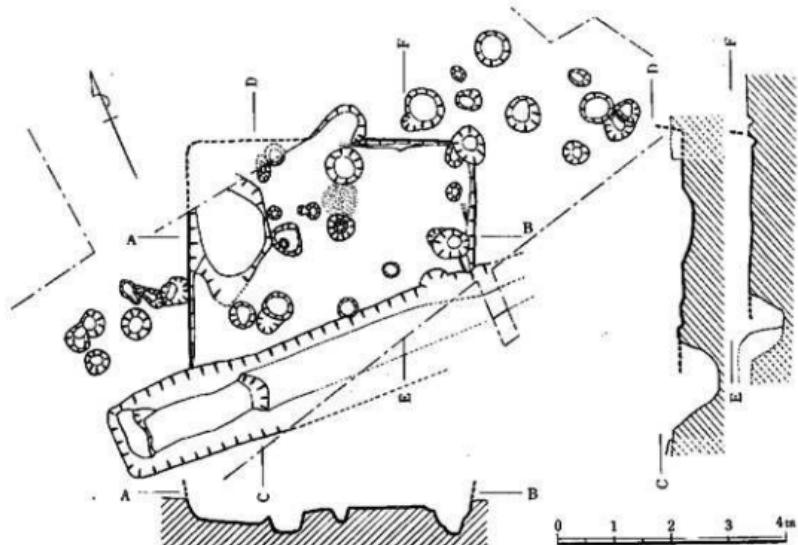
(堅穴住居址出土遺物) (第25図11・12・13) 遺物は少数で七箇器片のみ数点出した。要・壺・蓋で25街区堅穴住居址と同時期かあるいはやや下がる時期のものであろう。

### c. 27街区2号堅穴住居址 (第10図、第23図)

27街区に設定した十字形トレンチの南北トレンチの南端、27街区1号堅穴の南方30mの地点に堅穴の一部が検出されたので東西に拡張区を設けて堅穴住居址平面を露出した。堅穴の北西隅はすでに東西方向の後縁の溝によって切断されており、南辺及び東西辺の一部も後世の溝によって切断されている。堅穴住居址平面は、堅穴住居址の南端が溝の南壁以南には及ばないところから推定して、1辺5mの方形を示すものと考えられる。壁体の現存高は10cm範囲のものであるが西北隅は急に深くなり30cmにも及ぶ。壁は77°の傾斜をもっている。床面はほぼ平底であるが、西北の一角は東西1.4m、南北2.4m幅で20cm程度深くなり、土師器・須恵器片もこの凹地から多く出土している。北壁及び東壁沿いに幅5cm、深さ10cmの側溝が設けられているが、南壁沿いのそれは、床面に斜に30cm程度びているだけで、北壁沿いの側溝と同じ性質のものかどうか疑問である。これは中央より北方に片寄っており、直角60cmを示す。柱穴は堅穴住居址内外合わせて31個にも及ぶが、中には三重にも重なり合ったものもあるので、全てが同時期とすることはできず、堅穴住居の西外の柱穴状の穴から大豆ほどの大きさの植物の種子が約10粒発見された。

住居址南側を切る溝は後世のものである。東側は道路によって斜めに切断されている。幅2mで深さは東側で60cm、西側で75cmと深くなり、東から西に傾斜して、西壁より1.5mのところまで続いているが、溝が終わる所で一段深く掘り込まれている。

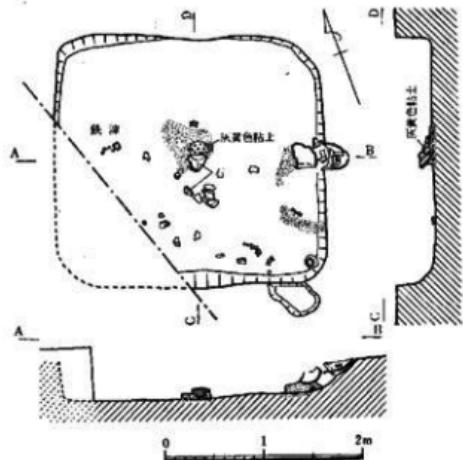
(堅穴住居址出土遺物) (第25図5・6・7・8・9・10) 5・6・7は土師器で8・9・10は須恵器である。6・7は焼成は歎かく、良質の粘土を棲っている。8の蓋はやや特殊な感じのするものであるが9・10の蓋杯は須恵T期に比定されるものである。従って、この堅穴住居の時期は5世紀末葉のものであろう。



第23図 27街区2号堅穴住居址実測図

### 3. 13街区塹穴（奈良時代）

(第9図、第24図)



第24図 13街区塹穴実測図

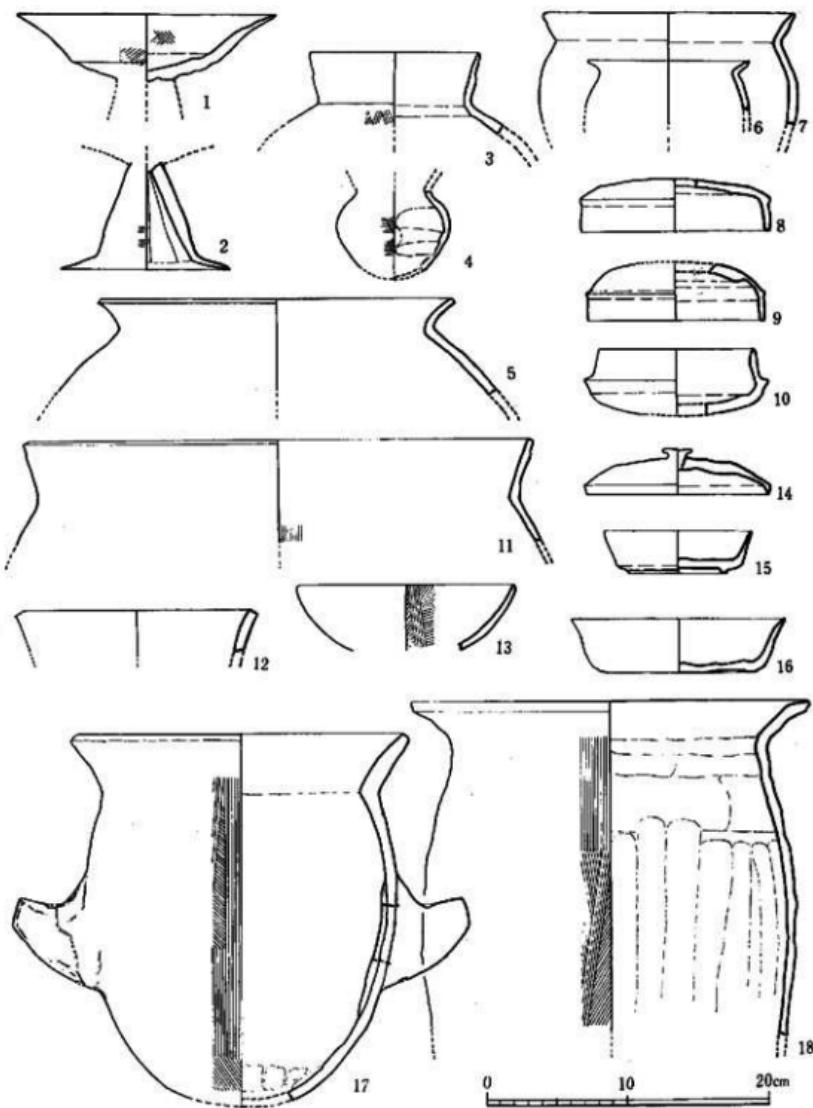
公園予定地の南にあたるこの13街区には、ほぼ東西に走る切通しがあり、その崖面に歴史時代に下る須恵器を出す塹穴住居址の断面が観察されたので、その北側を調査することにした。崖の縁から2m入ったところにトレンチを設けたが、これは存在せず、かわって別の塹穴があらたに発見されたため南北にトレンチを拡張した結果、整ったほど完全な塹穴形状があらわれた。東西2.75m、南北2.50mの正方形に近い精丸の塹穴で、掘りこみは地山面から垂直かやや外向きに40cmである。塹穴の西隅は土地所有関係で未掘のまま残した。地山の上面が既に30~40cm削平されているため、柱穴は不明であり柱穴としては塹穴

埋没後に掘りこんだ西よりの1個と東南隅の1個があるのみである。

塹穴内部には三ヶ所の焼けた土塊がある。そのうち東壁の南寄りにあるものは、比較的汲く焼土の厚さも約6cmで、それ以下床面までは他の塹穴内の土壌と同じ黒色粘質土であり床面も焼けていない。東壁中央に近い焼土は厚さ10cm以上あり、木炭片を混じて床面までつづき、焼土除去後も径37cmの範囲(破線の部分)の床面は赤く焼けていた。この焼上上に半分に割れた把手付土器が内面を上にし、口縁部を南に向けた状態で発見された。またこの施土につづく壁面を少し掘りくぼめ、口をやや下向きにした状態で壺が掘えられていた。この壺の口縁は三分の二以上存するから、1個の壺が採えられていたと思われる。この壺は焼土と陶器をもつものとみられる。おそらく盛り土に設けられた壺と、底をぬいて棒出しに転用された壺があったと考えられる。しかし焼土上に直接のつている把手付土器は特に火をうけた痕跡はなく、窓の一端と断定するには尚早である。次に中央の焼土は面積は最も広く、焼土は床面より5~8cmほどの盛りあがりがみられ、やはり炭が混在している。この焼土上に灰黄色粘土の層があり、単なるが跡とは考え難く、この塹穴内から多数の鉄滓が出土していて、あるいは製鉄関係の炉である可能性があるが、鋳造を復原できるほどの手がかりは残っていないかった。

(出土遺物)(第25図14・15・16・17・18)については東壁ぞいの窓付近から煙出しの施設として使用されたとも見られる瓦片、一対の把手を有する大型容器、更には東南隅から須恵器等、中央近くから須恵器が出土し、多くの土器細片は南壁近くに集中していて、窓附近そから流入した状態である。これらの山七品には八世紀頃の特徴が示されている。

このように小型の塹穴であり、多量の鉄滓が出土することなどからして、奈良時代の製鉄関係の工房跡と考えられる。



第 25 図 窪穴出土土器実測図 (8・9・10・14・15・16は須恵器、他は土師器)  
 1～4 (25街区)、5～10 (27-2号窓穴)、11～13 (27-1号窓穴)、14～18 (13街区窓穴) 出土

#### 4. 31街区貯蔵穴及び溝（第16図）

31街区においては一本の溝と2箇の袋状貯蔵穴及び若干の柱穴を検出することができた。

溝は断面盾鉢形を呈し、現地形にそってやや傾斜している。溝の包含層は遺物を殆んど含まない。部分的には擾乱されているが、大別して上層に弥生式土器と土師器、下層に七頭器の細片がみられる。溝の規模は不明であるが、住居地帯における排水溝の機能をもつものであろう。

袋状貯蔵穴はいずれも径約2.4mの円形を呈する。一は深さ約1.1mあり、底部がレンズ状にくぼみ、上すぼまりになった袋状を呈し、弥生時代のものとは形態を異にしている。上層に包含する上層は溝と同様であるが、下層には更に須恵器の細片を含んでいる。従って袋状貯蔵穴は溝とは関係なく、それよりも時期の下るものと考えられる。

尚、東壁に炭化米を多量に含む円形窓穴の一部が露出していたが、その深さは14cmで、既にその大部分が消滅している。炭化米層中から板付T式の窓の口縁が発見されている。炭化米はカーボン・データリングの資料として、また品種調査の資料として日下九州大学理学部及び農学部の協力を得て調査研究中である。

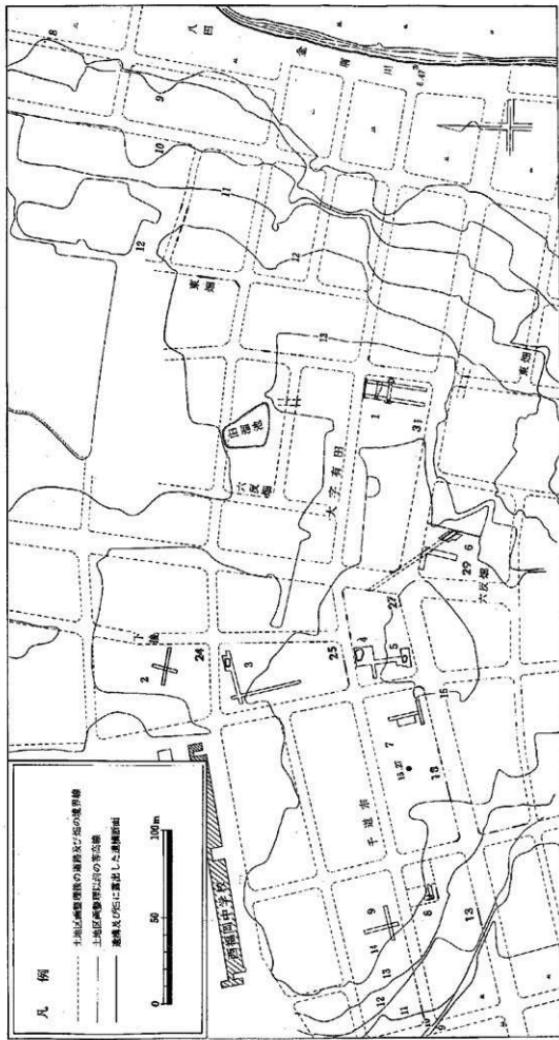
## IV む す び

われわれはどうやら1,000年にわたる常民生活の跡をとらえ得たようである。農耕にあけられた常民にふさわしい田部の名を冠した郷の名を、いまこの丘の南北の両端を占める小田部。有田の二つの部落が頗ちもっていることも、空間の中世を越えて古代と現代とを繋ぐ目に見えない糸のように思えてうれしくなる。いまはもう滅びたが、弥生中期を中心とした時代には、いまと同じように、この丘の北と南の端に大きな集落遺跡があった。古墳時代に入ると、今まで常には人影の余りなかったこの丘の上に、ばつばつ孤立した草葺小屋が建ち、排水溝にためた天水を菜園に注ぐ姿がある。

いま同じ丘に、孤立する木の色も新らしい青瓦モルタルの家の菜園に水を注ぐスラッガー姿とどうかがうのか、常民の集落の位置と様式を替えていくその歴史的力が知りたい。この調査には意外な収穫があった。これまで数粒しか採取されておらずダイヤのように大切なものに思った弥生前期はじめの炭化米が、両掌でくつて三十枚以上も発見されたことと、奈良時代の鉄製錬の工房がはじめて発見されたことである。前者は大げさに云えば日本で初めて、後者は九州ではじめてと云ってもよかろう。今回の発掘調査の仕事に御支援いただいた皆様に厚く感謝いたします。

## 有田遺跡調査関係者

調査員	鏡山 遼 ○前川 威洋 高倉 洋彰 (○印は執筆者)	岡崎 敬 ○下条 信行 黒野 肇	森 貞次郎(調査主任) 樹口 達也 藤原 勝利 蘇口 健二 安部 劣一	○小田富士雄 上田 和子 松本 理
調査補助員	武木 純一 石川 隆生	注田 芳久 釋田 輝樹	山下 孝義	中村 有三 田中 正広
地元調査 援助者	坂口 守 平川タニ子	松尾 増雄	坂口 武登	坂口 正敏 小林 次一
地主	青柳 ツル 古賀 龍雄 古野 明 毛利伊左雄	秋山 式雄 坂口 悅乃 松尾半三郎 毛利 祥和	蒲池 俊喜 坂口 武雄 松尾 政雄	神田 正彦 柴田穢五郎 松尾 豊生 松尾 康雄
協力団体	福岡県教育委員会、有田上地区面整理組合、西福岡中学校、朝日新聞社			
福岡市教育委員会	長東 正之 緒方 安臣 田中 道夫	大庭 武雄 花田 薫 中山 敦之	正木 利輔 松井 実雄 野上 淳次	青木 崇 田岡 鎮男 石橋 博
				鶴口 長美 日野 時彦 木下 悅子



第26回 有田道場要因  
(山吹き数字は倒区をあらわし、1~9は試験番号をあらわし第7回数字でご対照する)

昭和42年3月31日

発行 福岡市教育委員会

編集 九州大学文学部考古学研究室

印刷 株式会社 川島弘文社

